０４／１１／２８　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：真の信仰者とみことば
聖書箇所：ヤコブの手紙　１章１９－２１節

　私たち本当の信仰者は試練に出会ったときそれを心から喜ぼうではないか、そのようにヤコブは教え、励ましてくれました。彼は私たちに無理なこと、不可能なことを教えたのではありません。本当のクリスチャンはそのように試練を喜ぶことができるのであると彼は教えたのです。試練を喜んで受け入れる、試練の中にあっても主を信頼して忠実に歩み続けて行くというのは、実はその人が真のクリスチャンであるから、救われているからだと、ヤコブは私たちに語ってくれたわけです。ですから、このように言えます。試練に対する私たちの態度は私たちの信仰が本物であるかどうかを測る物差しであると。ヤコブはこの手紙を通して、私たちに本当の信仰がどういうものであるかを繰り返し教えて行きます。私たちが見てきたように、試練をどのように受け入れて行くのか、どのように試練に向かって行くのか、それが私たちの信仰が真実なものであるかどうかを明らかにするのです。
　今度はテーマを変えて、ヤコブは私たちに私たちの信仰が真実であるかどうかをチャレンジし続けるのです。１９節のところからヤコブが言うことは、神のおことば、聖書に対する私たちの態度が、私たちの信仰が真実なものであるかどうかを見極めることができるということです。私たち信仰者、イエス・キリストを信じる者、真のクリスチャンたちが、みことばに対してこのように生きて行くことが必要であると教えるのです。今回と次回に分けて２回、私たちはみことばに対する正しいクリスチャンの態度について学んで行きます。

☆みことばに対する正しい態度
●<u>真の信仰者は新生を経験した者</u>
　私たちはどのようにみことばを扱って行くべきなのか、これは非常に大切なことです。私たちがヤコブの手紙を通して繰り返しチャレンジされてきていることは、私たちの信仰が本物かどうかということです。本当にあなたは罪の赦しをいただいているのかどうか、そのことを彼は私たちにチャレンジしているのです。１９節を見てください。**「愛する兄弟たち。あなたがたはそのことを知っているのです。」**と、彼は私たちに本当に救われている人とはこのような人だと教えています。すなわち、本当の信仰者とは新生を経験した人であるというのです。「そのことを」とは前の１８節にある「私たちは被造物の初穂とされた」ことを指しています。私たちは新生によって、自分自身のために生きることから神のために生きる者へと変えられた、そのように生まれ変わったことをあなたがたはもう知っていると言うのです。この「知っている」ということばも大切です。ここで使われているのは「完全に知っている」ということばです。新約聖書の中には別の「知っている」というギリシャ語があります。それは「徐々に知識を得て行く」という意味で使われます。イエスがヨハネの福音書８章でこの二つの「知る」ということばをお使いになって話されている箇所があります。８：５５**「けれどもあなたがたはこの方を知ってはいません。しかし、わたしは知っています。」**と、「知っている」ということばが２回出てきています。「あなたがた」、すなわち弟子たちはこの方、父なる神のことを知ってはいませんと、彼らは神を少しは知っているが完全ではないと言い、「しかし、わたしは」と、イエス・キリストは父なる神を完全に知っていると言うのです。１９節の「知っている」は「完全に知っている」という意味です。だから、ヤコブは読者たちに「あなたがたは被造物の初穂とされたこと」、「新しく生まれ変わったこと」を完全に知っているでしょう？と言うのです。同時にこの「知っている」ということばの時制を見るとき、ヤコブが言いたかったことが明確に分かります。ヤコブは「知っているのです」と完了形で書いています。というのは、ヤコブは読者たちがもう新しく生まれ変わることを経験している、そして、その事実に則って今を生きているはずだと確信していたからです。
　そして、本当に救われた者には変化が生まれて来ます。イエスのために生きようという新しい生きる目的が与えられ、主を喜ばせたいという願いを持つようになります。その変化は周りの人たちも認めることになるのです。イエスがマタイ１３：２３で言われたように**「ところが、良い地に蒔かれるとは、みことばを聞いてそれを悟る人のことで、その人はほんとうに実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結びます。」**と変化が生まれるのです。神によって救われた人には変化が生まれ、成長して行くのです。ヤコブはそのことをよく知っていたので、繰り返し繰り返し「あなたの信仰は本物か？」と問うのです。彼は信仰は実によって明らかになって行く、信仰は行ないに変化が生まれてくると教えるのです。本当の信仰とはどれだけ知っているかではなく、それによって私たちの生活が変わってくるのです。そのことはヤコブがこのみことばを通して私たちに繰り返し与えるメッセージです。

１９節にはヤコブの人柄というものを見ることができます。ヤコブは自分は完全であなたがたはまだ未熟であると、そのようなスタンスで話していません。だから初めに**「愛する兄弟たち。」**ということばで語っています。彼は読者たちに大切なことを教えて行くのですが、ヤコブ自身もそのことを実践する一人であるということを印象づけるのです。神の望んでおられることを実践するために私も努力していると言います。だから、ともに励まし合いながらそのみわざを為して行こうと訴えるのです。救われていることを確信したヤコブは救われている読者に対して、救われている者にふさわしい生き方を為して行きなさいと、１９節の後半で三つのことを教えています。「なすべきことが一つ」と「してはならないことが二つ」あります。

「しかし、だれでも、聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそいようにしなさい。」

☆<u>信仰者としてふさわしい生き方</u>

（１） みことばを熱心に学んで行きなさい

「聞くには早く」あれと言います。私たちがもつべきみことばに対する態度です。みことばを聞くことにおいて早く迅速であれとヤコブは言うのです。なぜみことばを学ぶことが私たちクリスチャンには必要なのでしょう？それはみことばによって私たちは変わってくるから、みことばによって成長して行くからです。詩篇１１９：１３３に**「あなたのみことばによって、私の歩みを確かにし、どんな罪にも私を支配させないでください。」**とある通りです。私たちはみことばを熱心に学んでいるでしょうか？みことばの学びと信仰の成長は比例します。私たちはよく自分の信仰が成長しないと言いますが、自分の生活を振り返って見ると、みことばに接する時間が短いことに気付きます。そのような人に信仰の成長を望むのは無理なことです。みことばを学び理解し実践することによって私たちの信仰は成長するからです。しかし、私たちはいろいろな理由があってそこまで熱心にみことばを学んでいません。もちろん、私たちは個人でみことばを学びます。その機会を神はくださっているしそのことを神は命じておられます。しかし、ペンテコステ以降、神は教会をお建てになりました。何のためでしょう？教会にどうしてみことばを語る働き人を与えておられるのか、今の時代にあって神が望んでおられることは、教会を通して一人一人がしっかりとみことばを学び成長して行くことです。私たち牧会者、みことばを教える者の責任というのは、しっかりみことばを学ぶこと、そして、皆さんに神が何を教えておられるのか、神のみこころは何かをお伝えすることです。そのメッセージは自分に対するものでもあります。それによって成長するからです。私たちはどれほど熱心にみことばを聞いているでしょう？どうしても礼拝に出てみことばを聞くことができなかったとき、あなたはテープを聞くとか、インターネットを使うとかしておられますか？みことばを聞くことなしに信仰の成長はないとみことばが教えています。貪欲にみことばを学ぶことによって、私たちは神を知り、神のみこころを知り、変えられて行きます。箴言１３：１３にはこのようにあります。**「みことばをさげすむ者は身を滅ぼし、命令を敬う者は報いを受ける。」**。神のメッセージは非常にシンプルです。みことばを愛し、みことばを学び、みことばを実践して行くならそこに神の祝福があるけれど、みことばを無視して忘れて歩むならそこには祝福はないというのです。救われているなら当然、みことばを学びたいという願望があるはずだから、熱心に学んで行きなさい、それが救われているあなたにとって第一番目に必要なことだと教えます。

（２）よく考えて語りなさい

「語るにはおそく」とあります。私たちがすぐにしてしまうことはよく考えないでものを言ってしまうことです。ヒーバートという神学者はこのようなことを言っています。「表現の自由には重大な責任が含まれていることを忘れてはならない」と。自分の言ったことには責任が生じるのです。ソロモンはときに私たちが苦笑するようなことを言いますが、それによって私たちに教えてくれるのです。箴言１７：２８**「愚か者でも、黙っていれば、知恵のある者と思われ、そのくちびるを閉じていれば、悟りのある者と思われる。」**、また、同じ２９：２０では**「軽率に話をする人を見ただろう。彼よりも愚かな者のほうが、まだ望みがある。」**と言います。彼が言いたいことは自分のことばに細心の注意を払いなさいということです。というのは私たちは余りにもことばで失敗する者だからです。言わなくても良いことを言ってしまったり、どうしてあんなことを言ってしまったのだろうと後悔するばかり、ゆっくり考えてみたならもう少し違う言い方ができたのに…と。私たちは祈りながら主が喜ばれることを話すことができるように、また、神が望んでおられるように、人の徳を高めることを話すことができるように主の助けをいただき続けて行かなければならないのです。救われている者にヤコブは訴えます。ことばに気をつけようと。

（２） 怒りに負けない

「怒るにはおそいようにしなさい。」と記されています。この「怒り」というのは、激怒し爆発してしまうような外に現われる怒りではなく、内側の怒りを意味します。心の中にある恨み、憤り、憤慨です。それは必ずしも周りの人々には明らかにされませんが、心の中にはそのような悪い思いがあり、くすぶっているのだから、何らかの形で外に現われます。口からふさわしくないことばとなって出てきます。

どのような怒りであってもそれを心の中に秘めているなら、それは大きな問題です。そのことはこの後、ヤコブが説明してくれます。同時に怒りというものを考えたとき、人に対して怒りをもつだけではない、神への怒りというものがあるのです。私たち信仰者も信仰の歩みの中でときに物事が思い通りに進んで行かないと、神に対して怒りを覚えます。それはみことばに対する「かたくなさ」につながります。聖書を読んでも意味がない、神は聞いてくれないのだからと。このような神に対するかたくなさも間違っているというのです。１９節の初めに**「愛する兄弟たち。」**と複数の者たちに語りかけているヤコブは、その後半では個人に対して語りかけるのです。この命令を彼は個人に与えるのです。このことはあなたがやらなければいけないことだからとヤコブは言うのです。

さて、何をなすべきかを教えたヤコブは、この怒りがどれほど大きな問題であるかを２０節で説明して行きます。怒りを避けなければならないその理由が書かれています。**「人の怒りは、神の義を実現するものではありません。」**と。なぜ私たちは怒りを心の中に秘めていてはいけないのか、「怒りは神の義を実現できない」からです。どういうことでしょう？神の義とは何を意味するのでしょう？神のご性質を思いますが、ここではそのことを言っているのではありません。神が私たちクリスチャンに要求される生き方です。私たちが神の前に正しくきよく生きて行くようにと教えるのです。そのような生き方が実現できないと言います。実現とは実行、実践という意味です。ですから、もし私たちが怒りをもっているなら、その怒りは神が望まれる生き方を妨げるものになる、怒りをもっているなら神に喜ばれる者に成長することはないのだと言うのです。それほど怒りというのは危険なものなのです。**「神の義を実現するものではありません。」**と現在形で書かれているのは、それが継続した真実だからです。今もその通りなのです。そのことを考えるとき、あなたの心の中に人に対する怒りはありませんか？人のことを悪く思ったり考えたりすることはありませんか？たとえば、そういう思いをもってだれかと話すときに話題によって、同じような怒りをもっている人は喜んでその会話に参加してきます。結局その会話はだれかに対する非難になったりする、そのようなことを経験されことがあると思います。それは罪であることを覚えなければいけません。神の栄光を現わすものではない、それはあなたの信仰の成長を妨げるものです。どんな小さな怒りでもそれが私たちの心の中にあるなら、それは私たちにとってマイナスです。神が喜ばれないものです。その怒りの矛先が人であっても神であったとしても怒りは間違っているのです。私たちは自らの心をしっかり吟味することが必要です。そして、もしそのような思いをもっているなら、主の前に告白することです。

☆<u>実践するための助け</u>

では、私たちが神が教えてくださっている正しい生き方を実践して行くためにはどうすればいいのでしょう？２１節でヤコブは<u>クリスチャンとしてふさわしい生き方をして行くための助け</u>について教えてくれます。**「ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを、すなおに受け入れなさい。」**と、捨て去ることと受け入れることを対比して描いています。このようなことを捨て去りなさいと言って二つのことを教えています。**「捨て去る」**ということばは「洋服を脱ぐ」ということばを比喩的に使っています。私たちが脱ぎ去るべき二つのこと、

〇すべての汚れ

これは道徳的な汚れを指しています。クリスチャンにふさわしくない生き方、クリスチャンの生活と調和しないこと、そのすべての汚れです。この「汚れ」ということばは衣服やからだを泥でよごした汚れという意味に用いることができると、バークレーは言っています。彼は「語源となっている『ルポス』ということばが医学的な意味で用いられるときには『耳垢』を意味する、このことばがここで表現しようとしていることにこのニュアンスが保存されているとするのは大いにあり得ることである、つまりヤコブは真の神のことばに読者の耳を傾けさせるのに妨げとなる一切のものを取り去れと言っているのである、耳垢が溜まると聞こえにくくなる、同じように人間の罪もその人を神に対して聞こえなくして行くのだ」と言います。だから罪をもっていては成長しないということです。

〇あらゆる悪

これは人に対する悪意であったり、敵意、恨みです。そういうものを持っているといつの間にか人を傷つけたり、人に害を及ぼすことを望んだりするのです。そのような間違った思いを脱げ捨てるようにとヤコブは教えるのです。

次にこのようなものを受け入れなさいと続けて教えています。信仰者として成長を妨げるものを脱げ捨てる私たちは、信仰を助けてくれるものを受け入れることが必要だと言います。それは、

〇みことばを受け入れる

このことはヤコブの他の聖書著者も私たちに教えています。パウロはローマ１３：１２－１３で**「夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。:13 遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありま**

せんか。」と教えています。私たちが受け入れるべきものは神のおことばであると。もちろんこの当時、新約聖書は存在していなかったので、神はいろいろな預言者、教師を使って神のメッセージを語らせました。ペテロもⅠペテロ２：１－２で**「ですから、あなたがたは、すべての悪意、すべてのごまかし、いろいろな偽善やねたみ、すべての悪口を捨てて、:2 生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」**と教えている通りです。神のおことばは私たちにとって有益なものだからそれを受け入れるようにと。２１節でヤコブは**「心に植えつけられたみことばを」**と記しています。神は私たちが成長するために必要なものをもうすでに与えてくださっているのです。そして、そのみことばをどのように受け入れたらよいのか、その態度をも教えてくれています。**「すなおに受け入れなさい。」**と。これが大切なことなのです。すなおで従順な態度、学ぼうとする態度をもってみことばを受け入れることが必要だと言います。私たちの問題は、神がどのように言われても私の考えは…と自分の考えが第一、最善であると、間違ったプライドをもっていることです。私たちに必要なことは主の前に謙虚になることです。主よ、どうぞ私に語ってください、あなたのことを知りたいです、あなたが教えてくださることをしっかり学びたいです、とそのような態度をもって神のことばを聞くようにと、それがここでヤコブが教えることです。**「すなおに受け入れなさい。」**とことばが並んでいるのは、一人一人の内側の態度がこのようでなければならないと強調しているのです。そして、このことばの時制は切迫した、緊急性があることを示します。今すぐそのような態度をもって、とヤコブは教えるのです。そのような正しい態度をもって主の前に立っていた人たちがいました。パウロはテサロニケのクリスチャンたちを褒めたのですがベレヤのクリスチャンたちをもっと褒め称えています。使徒１７：１１**「ここのユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。」**、彼らはみことばを愛するがゆえに、神を愛するがゆえに、語られていることが真実かどうかしっかり調べたというのです。その態度をパウロは喜んだのです。そして、その態度をヤコブは私たちに教えるのです。

なぜ、みことが大切なのか、２１節に**「みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。」**とあります。<u>みことばは人に救いをもたらします</u>。この「救う」ということばの時制も大切です。ヤコブはここで神のおことばが為せる働きを単純に述べているのです。それは罪の赦し、罪からの救いです。その力がみことばにあると教えてくれます。そのことはみことばが繰り返し私たちに教えてくれることです。ローマ１：１６**「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」**、Ⅰペテロ１：２３**「あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることのない、神のことばによるのです。」**、ローマ１０：１７**「そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。」**と、このようにみことばは私たちに罪からの救いをもたらす力があるのです。そして、もう一つ、<u>みことばは私たちを成長させます</u>。コロサイ３：１６に**「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住まわせ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。」**とあります。パウロが言っていることは、あなたの生活がみことばに支配されるように、みことばに満たされた生活を送りなさいということです。みことばによって考え、みことばに基づいて判断、選択をして行くのです。ちょうど、聖霊なる神に満たされるというのが、聖霊なる神の導きに委ねて歩んで行くように、みことばに導かれ、みことばに支配されて歩んで行きなさいと。そのときの結果がどのようなものか**「知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、」**、と、このようなことがみことばに支配されている人には起こるのです。みことばを人々に伝えようとします。なぜなら、みことばの中に神のすばらしさを知るからです。神がどんなにすばらしいかを知ればそれを誰かに語りたくなります。同時に、みことばをもって愛する兄弟姉妹が罪の中にいるなら、それを戒めるというのです。

また、**「詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。」**と、その人の内に喜びや感謝が満たされて行くと言います。このようにみことばは私たちの内に働きます。神のみことばが私たちを支配しているときそこには喜びがあり感謝がある、聖霊に満たされているとき、私たちには喜びがあり感謝があるのです。だから、私たちはみことばをしっかり学び、みことばによって判断することです。私たちは日曜日にみことばを聞いても、その後、聖書を閉じて帰り学んだことをすっかり忘れてしまうなら、私たちの生活には変化が生まれて来ないのです。エレミヤという一人の預言者がいました。彼は孤独でした。というのは、その国の人々が神に逆らったからです。彼が経験していた苦しみは終わりのないもののように感じられました。もちろん、エレミヤも神を疑ってしまったり、いろいろな過ちを犯しますが、しかしそのエレミヤが、神のみことばを忘れた人々と妥協して生きて行くのかどうかという選択があったときに彼がした選択は、神に従って行くという選択だったのです。そのエレミヤがこのように告白しています。１５：１６**「私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。万軍の神、主よ。私にはあなたの名がつけられ**

ているからです。」、つまりエレミヤが言うことは、確かに状況は大変だし、心を騒がすものはいっぱいあるけれども、しかし、神のおことばが私にそのようなものに左右されない楽しみ、喜びを与えてくれる、だから、私はみことばを食べたというのです。そのように彼はみことばを受け入れ、みことばに立とうとするのです。まだ、イエスを信じていない人は、神のみことばを聞くと心が痛いと言いますが、それは、神があなたの心に働いているからです。心からすなおにそのみことばに聞き従うことです。神に逆らうことを止めて神を受け入れてこの救いに与ることです。みことばは救いをもたらし、みことばは信仰の成長をあなたにもたらすのです。そのために必要なことは、主よ、どうぞ語ってくださいというへりくだったすなおな態度です。みことばとはどういうものなのか、パウロはⅡテモテ３：１６－１７で教えています。**「聖書はすべて、神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。:17 それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」**と、みことばはあなたを成長させるのだと。あなたが主にあって成長することを望んでいるなら、主にますます喜ばれる者になって行きたいと望んでいるなら、答えは一つです。神のおことばをすなおに受け入れて行くことです。このみことばを真剣に熱心に学んで行くことです。そして、神の助けによってみことばを熱心に実践して行くことです。しかし、先ほどから見ているように、その選択をするのは私たち一人一人、私が決めなければならないのです。どうぞ、みことばの学びに関して貪欲になってください。このみことばはあなたに神を教え、神のみこころを教えてくれます。そして、成長をもたらします。

　みことばに対する態度、それがあなたの信仰が本物であるかどうかを明らかにするのです。